# 吉備児島と神武天皇聖跡高嶋宮伝説地の考察

丸谷憲二

#### 1 はじめに

『古事記』(712年成立)の国産みにおいて、イザナギ・イザナミが大八洲を産んだ後、兒嶋、小豆島(あづきしま)、大島、女島、知訶島(ちかのしま)、両児島(ふたごのしま)を産む。『日本書紀』(720年成立)には吉備子洲(きびのこじま)、子洲(こしま)とある。何故、国産み神話に兒嶋が収録されたのかを考察したい。

## 2 国産み神話に何故、吉備兒嶋が選ばれたのか

『古事記』の「**然後還坐之時」に注目**したい。知訶島(ちかのしま)が五島列島である。福江島を大知 訶(おおぢか)と呼び、上五島の島を「こぢか」と呼んでいた。五島列島の北に小値賀島(おぢかしま)がある。最後の両児島は五島の南西に浮かぶ男女群島説がある。

小豆島と兒嶋が黄蕨(吉備)国に属し、知訶島が五島列島である。つまり、黄蕨国から五島列島の間を 意味している。黄蕨国のみが小豆島と兒嶋の2島収録されている。大和政権にとって**瀬戸内海と吉備の 穴海が最も重要な場所であった**ことを意味している。

謂大八嶋國。然後還坐之時。生吉備兒嶋。亦名謂建日方別。次生小豆嶋。亦名謂大野手(上)比賣。次生大嶋。亦名謂大多麻(上)流別【自多至流以音】次生女嶋。亦名謂天一根【訓天如天】次生知訶嶋。亦名謂天之忍男。次生兩兒嶋。亦名謂天兩屋。【自吉備兒嶋至天兩屋嶋并六嶋】

## 2.1 亦名謂建日方別とは

吉備児島の**亦名が建日方別(たけひかたわけ)とあり意味不明**である。解読に挑戦した 5 説を紹介したい。金甲山頂の郡神社の旧址と国津神社の調査が必要である。

#### ① 山崎多喜男説 昭和50年

「児島には建日方別を統治指導者に置いた」ことです。

### ② 池田潤説 平成23年

吉備児島は、ほぼ北緯 34 度 30 分に位置し、神武天皇が橿原宮を築いた「六合(くに)の中心(もなか)」である大和の畝傍山(うねびやま)の真西に位置している。そのことは、この島の別名である建日方別(たけひかたわけ)の中に「日方(ひかた)」と記されていることからも明らかである。かって、神武天皇が東征の時に立ち寄った筑紫国の岡水門(おかのみなと)を詠んだ万葉歌に、その場所を「日方吹くらし」と歌っていた。この日方は太陽の方向から吹いてくる風を意味していたが、建日方別の日方はむしろ、その文字通り太陽の方向を言うのであろう。まさにここは「六合(くに)の中心(もなか)」である大和の畝傍山からは、春分や秋分の特別な夕日が沈んでいく方向に当たる。

# ③ 藤井駿説 昭和48年

吉備津神社の岩山宮は建日方別を祀る。社伝では岩山宮は、「児島の国魂(くにたま)」を祀ると伝え、神体も巨巌であるというう。おそらく吉備の磐座(イワクラ)の信仰ではあるまいか。

④ 永山卯三郎説 昭和3年金甲山頂に郡神社の旧址存す。祭神は建日方別である。

# ⑤ 岡山県児島郡誌説 昭和52年

国津神社 児島の国魂にして大氏神なり。宝物として鏡一面、矢一本あり。

#### 3 児島の屯倉

583年の百済から渡り来た日羅らが「児島屯倉に行き到る」に注目したい。児島屯倉は海路に臨む迎賓施設の性格を予測させる。「吉備児島駅館跡」と言い換えても良い施設である。博多湾にあった迎賓館と同じように、外交使節にとって重要な瀬戸内に設けられた宿泊施設であった。児島屯倉の所在地は不明である。永山卯三郎説の「金甲山頂に郡神社の旧址存す。」は、6世紀末頃の須恵器が出土し、駅館跡の姿が見えてくるならば児島屯倉跡と推定できる。

## 4 神武天皇聖跡高嶋宮伝説地説

「高島についてはいろいろ史家の間に議論があったが、昭和 15 年の紀元 2600 年祝典にあたり、児島郡甲浦村の高島がその遺跡伝説地ときまり終止符が打たれた形となった。」と巌津政右衛門氏は報告している。昭和 15 年 5 月 6 日(月)官報 第 3996 号である。

しかし、山崎泰二氏は地元の伝承を調査され「明治 18 年 8 月 5 日に明治天皇が三幡港に上陸され、ここが吾等の祖先の神武天皇謂れの地かと発せられ、同席していた伊藤博文公は早速当時の文部省に命じ、官報で神武天皇聖跡高嶋宮伝説地と交付。」と当時の経緯を報告している。文部省は伝説地であり詳細な調査不要と考えたようである。文部省の調査不足を指摘し、地名学による文献調査結果として水戸光圀説と世良長造説の笠岡市神島神社説を正しいと報告する。高島神社は 1713 年(正徳 3 年)には高嶋大明神と記録され、『詣高嶋記』に、「備前国児島郡高嶋社者春日霊神也」とあり、1803 年成立の『吉備温故秘録』も「所祭の神を南都春日と同じといふ。」「一説に神武天皇・・・」と報告している。



## 5 竹島と竹島神社

『岡山県児島郡誌』に竹島神社が収録されているが説明は高嶋神社と同一である。竹林栄一氏(岡山県立博物館)も、昭和3年の『児島郡神社誌』には「甲浦村大字宮浦に鎮座する旧村社竹島神社・・・」と記録している。これは氏子達が神武天皇聖跡高嶋宮伝説地説を拒否し、島名と神社名を変更したと考えたい。

### 6 磐座(イワクラ)信仰

高島の中央から南寄りの海抜 300m の岩磐山に磐座、祭祀跡がある。高さ 3.65m の方柱状の巨石が立ち、周囲にも巨石が配置されている。「一見自然の岩塊のようであるが、この平たい石の中には**牡蠣の設の付着したものがある**から、海岸から運び上げて配置したものであることは明らかである。」と報告されている。中央の立石の周囲から鉄族などの小鉄片等が多数発見されている。土器から見た高嶋遺跡の年代は 5 世紀末~6 世紀初頭の比較的短期間の祭祀と報告され、航海の安全祈願と推定されている。



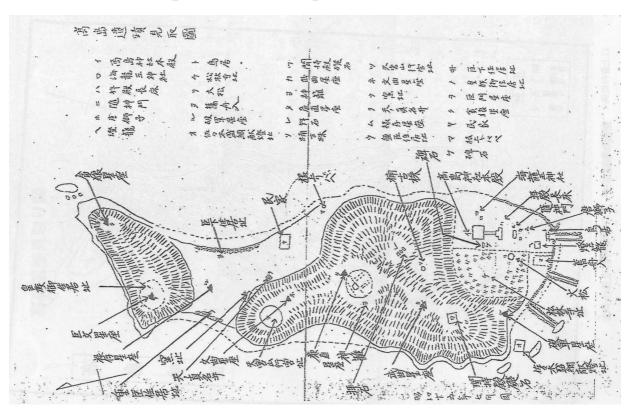


高島祭祀遺跡の立石

北斗七星降臨伝承

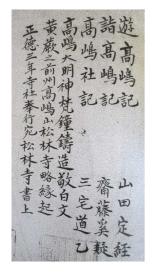
# 7 北斗七星降臨伝承

1713年(正徳3年)の『黄蕨之前州高島山松林寺縁起』に、「仁寿元年(851年)安行僧都と云人南都春日明神にまつでて通夜したまふ其夜の夢に一の島に至る其島の形三曲七堆にして宛も北斗七星の列次のことし忽に一人の老翁現て日、此所は観音大士垂迹の地北斗七星降臨の島也。」とある。この縁起は1721年(享保6年)成立の『備陽記』と『岡山県児島郡誌』に収録されている。



### 8 吉備の最古の表記『黄蕨』

1713年(正徳3年)の『**黄蕨之前州高島山松林寺縁起』の「黄蕨」に注目**したい。吉備の最古の表記である。1842年成立の『東備郡村志』には、大成経に追記して「今も、此島蕨甚だ多く、又其甚だ早く、



春雪を破て出づ。高島の早蕨とて佳産とす。味ひ亦他所のものに勝て尤も佳なり。季春長時手其茎七八尺に至る。一丈計なるも稀には有べし」とあり、昭和15年の水原岩太郎氏の『児島参修高島考写』にも、「此の島の蕨は古来高島の早蕨と称して其の風味の佳良なるを人口に膾炙して居る事である。彼の備前国内の名物を列記せる備前往来なる書にも高島の早蕨と載せてある。」「昭和15年8月15日吉備考古会の一行邑久郡牛窓沖の諸島を見学の際に青島にても長さ約四尺位の蕨を見つけ是を以ってすれば我地方には独り高島のみならず往々にして長大の蕨を発生するものなる事を知る可きである。」と植物生態学で報告している。此の蕨が現在も自生しているかの確認が必要である。

『黄蕨』は、推古 30 年 (622 年) 成立の『先代旧事本紀大成経七十二巻本』に ある 吉備の最古の表記である。

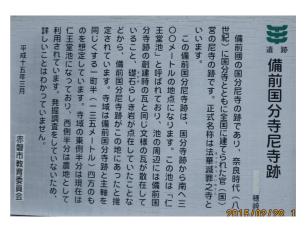
# 9 高島山松林寺普門院 国分尼寺説

1713年(正徳3年)の『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』に、「当寺は原(もと)当国の国分尼寺にして聖武天皇天平11年(739年)の御建立也」とある。松林寺の位置は高嶋遺跡見取図によれば高嶋神社の隣が松林寺跡とあり、高嶋神社の別当寺(江戸時代以前に、神社を管理するために置かれた寺)である。

備前国の国分尼寺は国分寺跡から南へ300mの赤磐市馬屋、国分寺の近くにある。「当国の国分尼寺」とは「国分尼寺の創建は8世紀中葉頃で廃絶は鎌倉時代以降と考えられる。」との亀田修一説(岡山理科大学)によれば、国分尼寺廃寺後の法灯継承と考える。



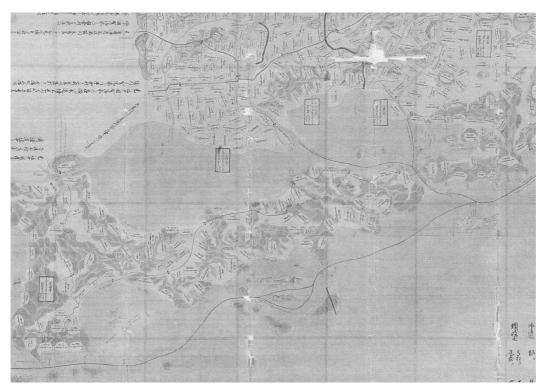




## 10 まとめ

吉備児島と高島に関する最も重要な調査は、吉備の穴海の境界線確認である。現存する最古の吉備の 穴海絵図は、1644年(正保1年)の備前国絵図である。児島の屯倉の位置確認、永山卯三郎説の「金甲山 頂に郡神社の旧址存す。」は、6世紀末頃の須恵器が出土し駅館跡の姿が見えてくるならば児島屯倉跡と 推定できる。昭和15年に確認されている長大の蕨が現在も自生しているかの確認が必要である。

『先代旧事本紀大成経 国造本記』に、「黄蕨縣国造、黄蕨穴国造、黄蕨風国造」と3国あり、児島は黄蕨穴国造である。「日代宮御世、輪丹臣同祖彦熊命孫八千足尼、定賜国造」は未解読である。



1644年(正保1年) 備前国絵図(岡山県立図書館蔵)

## 参考文献

- 1 『古事記と日本書紀』2010年 イーストプレス
- 2 『古事記祝詞』『日本古典文学大系 1』昭和 33 年 岩波書店
- 3 『古代日本と児島半島史話』山崎多喜男 昭和50年
- 4 『古事記のコード(暗号)・太陽のラインと隠された古代地図』池田潤 戎光祥出版
- 5 『岡山県児島郡誌』私立児島郡教育会編 昭和52年 文献出版
- 6 『吉備児島略史』永山卯三郎 昭和3年 永玄石稿
- 7 『吉備津神社』藤井駿 昭和 48 年 日本文教出版
- 8 『岡山市史 古代編』昭和37年 岡山市役所
- 9 『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』丸谷憲二 『きび考第4号』 平成23年7月
- 10 『遊高嶋記 他』1713年(正徳3年)『池田家文書』
- 11 『岡山県児島郡誌』昭和52年 児島郡教育会 文献出版
- 12 『吉備温故秘録 上巻』大沢惟貞 『吉備群書集成 第7号』昭和45年 歴史図書社
- 13 『式内社調査報告 第二十二巻』
- 14 『吉備の古代寺院』湊哲夫 亀田修一 2006年 吉備人出版
- 15 『岡山県史 原始古代1第二巻』平成3年 岡山県
- 16 『東備郡村志』『吉備群書集成(二)』昭和45年 歴史図書社
- 17 『児島参修高島考写』水原岩太郎 昭和 15 年
- 18 「吉備高嶋宮考」春成秀爾『日本考古学史研究 第2号』2014年 六一書房
- 19 『吉備国の語源「黄蕨」調査報告』 丸谷憲二 平成 20 年 8 月 24 日
- 20 『2月例会資料 記紀伝承の児島高島探訪』平成27年2月11日 先史古代研究会